筑波学院大学紀要第４集　149～158ページ　　2009年

＜研究ノート＞

石に描かれたみほとけ
― 線刻表現の石仏の分析 ―

千葉　隆司*

Drawing on Stone Make a Picture of Buddhist

Takashi CHIBA *

室町時代後期から戦国時代にかけての筑波山東麓地域には、常総型板碑に線刻表現をした石仏が造立された。それらは数量が少なく、在地の文化とは言い難い。中世という時期に限定してみると、線刻表現の石仏は、常陸国南西部や下総国北西部地方で造立された武蔵型板碑において、鎌倉時代後期から戦国時代にかけて少なからずみられたものであった。本稿では、線刻表現の石仏を武蔵型板碑や磨崖仏にみる山岳仏教との関係に、その造立系譜を求めてみたものである。

キーワード：線刻石仏　変成岩　武蔵型板碑　磨崖仏　山岳仏教

１．はじめに

石仏には、その表現法により大きく分けて陽刻と陰刻がある。陽刻は、肉彫り、半肉彫り、薄肉彫りなどの彫り上げる厚さによって分類されている。この陽刻に対し、線彫り（線刻）や彫りくぼめて表現したものを陰刻とよんでいる。また、陽刻と陰刻を併用したものもある。

筑波山東麓地方は、中世において五輪塔が石造物文化の主流となる中、僅かに仏像を線刻で表現する常総型板碑が特徴的に造立された。本稿では、これらを紹介し、分析すると共に、当地域の石仏造立の系譜に迫ってみたいと思う。

２．筑波山東麓地域の線刻石仏

２．１　かすみがうら市上佐谷地区の地蔵菩薩

かすみがうら市上佐谷地区の畑地に、変成岩に線刻された通称「北根地蔵」がある。北根地蔵は、高さ100cm（現況）、幅75cm、厚さ８cmを計る板石に、中央上段に梵字のアとカが上下に並ぶ。その下に地蔵あるいは僧侶風と思われる人物の立像が描かれている。頭部は比丘尼風となり、袈裟衣をまとっている。左手は左胸前に上げ、何かを持っているようにも思えるが表面が摩耗しているため判

＊　かすみがうら市郷土資料館、Hometown Museum of Kasumigaura City

然としない。右手は、右腰の辺りに下げている。この地蔵像の下部には三行にわたり、左から「右二此院内　末代七百　文賣寄進」と記される。さらにこの中央部分の左右に２行にわたる銘文が刻まれている。右側には「梵字（ア）妙海禅尼□位　妙林　□法皈元法秀禅尼霊」と２人の戒名、左側には「延徳貳稔三月三日　真□法禅門　　梵字（ア）性□禅門□位　性金」と石塔造立年号と共に２人の戒名が記されている。

この石造物が立てられている所は、上佐谷地区の真言宗古刹の医王山瓦場寺円明院の東側約200mの位置にある。『新編常陸国誌』によると円明院は、府中宮部不動院末、つまり石岡市宮部の明王山虚空蔵寺不動院の末寺であったことが分かる。不動院は、明応二年（1493）に山城国宇治郡醍醐三宝院の二十六世範祐の弟弘範が中興に当ったことから、三宝院の末寺となったという。この際に三宝院から贈られたとされる宝塔鈴（茨城県指定文化財）が伝わっている。この不動院に円明院が末寺として組み込まれた背景には、やはり醍醐寺三宝院系の系列に円明院があったことからであろう。醍醐寺三宝院の系統は中世において関東地方に著しく教線を拡大したことで知られる（内山1986）。常陸国南部は、特に三宝院の系統にある西大寺流真言律宗の東国布教に当たった良観房忍性の活動拠点となったことから、戒律弘布の退潮の結果として残存した真言密教的要素が、影響下にあった寺院を中心に真言密教の道場化を進めることになり、醍醐寺座主実勝（1241～1291）を祖とする実勝方の真言宗を受け入れるきっかけとなっていったのである。実勝の孫弟子に当たる乗海は、小田氏支配下の寺院に中興開山伝承が多い。さらに円明院の北側約１km

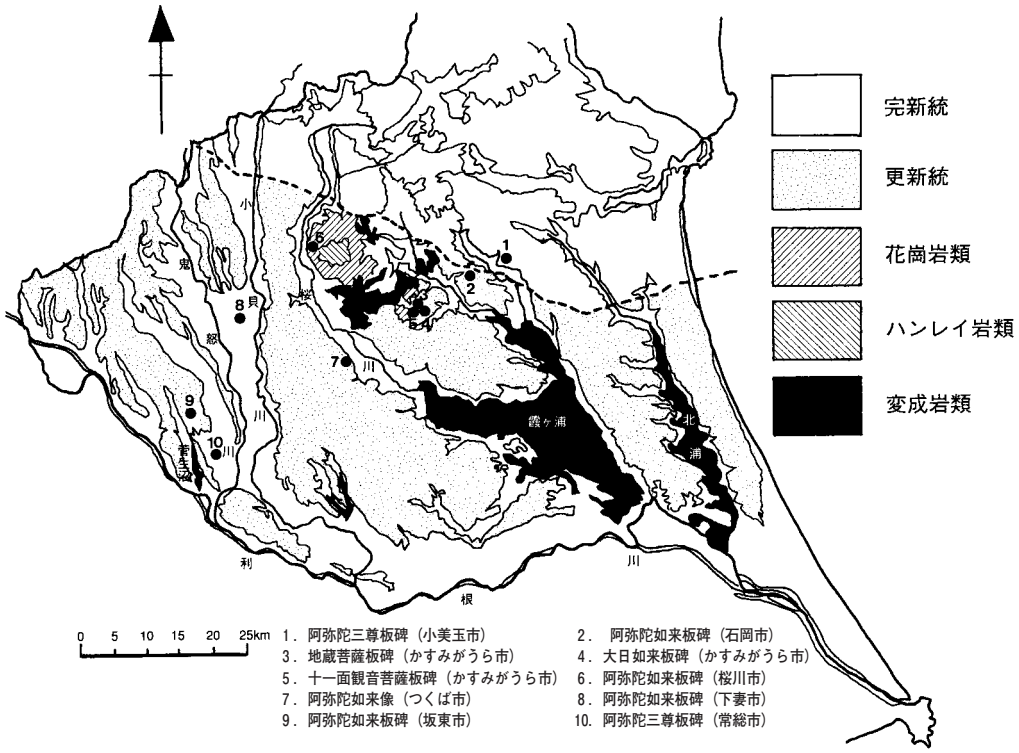


図１　茨城県南部の線刻表現の石仏分布図（茨城県自然博物館　地質概略図　1998に加筆）

にあった志筑山惣持院願成寺の中興伝承も乗海であり、縁起には「醍醐山に中将法印乗海といえる智行兼備の名徳あり。故有て東国に下り、当山に住して灌頂の密壇を開きけるに、負笈の者争い来りて密灌をかけ、中にも寿仁、叶日の両師其脈を得て数多の廃寺を修し、所々の伽藍を創む。当国の密経此時を盛んとす。」と記されている。このような環境の中で、円明院も三宝院系統の寺院として中世の時期に祈願寺として存在していたものと考えられる。

この円明院のすぐ近くに、この北根地蔵が造立されたのである。銘文の延徳２年という年号から西暦1490年に建てられたことが、そして二此院に700文寄進？、さらには４人の戒名と共に２人の僧侶名が記され供養されていることが分かる。右側の戒名は「・・・禅尼」、左側の戒名は「・・・禅門」とみえるこから男女２名づつ記しているといえる。これらの人物の関係はいかなるものであろうか。造立月日も、意味深げな３月３日とみえ上巳の節句である。また、この頃から戦国の世が本格化し始めることもこの石仏造立に関係するであろう。

２．２　かすみがうら市上佐谷地区の十一面観音菩薩像

かすみがうら市上佐谷の個人墓地内に変成岩に十一面観音像を線刻した石造物がある。この石造物は、高さ82cm、幅 45cm、厚さ５cm の板石に、中央に十一面観音菩薩坐像、その下及び左右に銘文が刻まれている。十一面観音菩薩坐像は、左手に蓮華を挿した澡瓶、右手は垂下して掌を外に向け、大指と頭指を捻じる。頭部周辺には一重円輪を配する。簡略化された蓮台に座する形で、足首などは明確に表現されていない。銘文は向かって右に「為田上□□□・・・・・・婦□□・・・」、十一面観音菩薩坐像の下に「永代観音□□　□□真中□□　弥三郎」、左に「明應五年丙辰二月吉日　本願弥八」と刻まれている。

この石造物は、筑波山系の浅間山麓の個人墓地内に立てられており、前述の地蔵菩薩の石造物の造立場所より北西約500m のところにある。しかも地蔵菩薩石造物の造立年の６年後に立てられたもので造立される場所も含め、両石造物の関連が想定される。

上佐谷地区は、中世の時期はほぼ大掾氏領に属していた。佐竹氏は、大掾氏領を攻略するとその領地は主に家臣の南義種に預けた。その後、文禄５年（1596）に実施された太閤検地では大掾氏領の「府中城」及び周辺の村々は6246石の「城領」とされ、この中に上佐谷村も含まれていた。上佐谷村は『文禄五年御蔵江納帳』には、「高三百八十石六升、此内四十石四升荒　定物成　四十三貫文　此内廿五貫弐百文　かかり　同上さや」とあり、慶長７年の『常陸国新治郡内ノ内上佐谷村御縄打田之水帳』の延享２年（1745）の写しをみれば田畑90町９反、740石余の村高である。上佐谷村の農民階層は上層農民の比率が高く小農自立の不徹底な村と解されている（吉田　1983）。その中で非農民的名称者をみると武士の系譜を引くものに次、宗教関係者と思われる人物名が見られる。おそらく、先の地蔵菩薩石造物やこの十一面観音菩薩は、こうした武士や宗教者が関与する中で造立されたものであろう。水帳にみられる武士層の人物も戦乱ともなれば、大掾氏と共に戦地へ赴いたものと考えられる。こうした戦乱で戦死した人物の供養目的で地蔵菩薩石仏、十一面観音石仏を造立したのではなかろうか。

２．３　かすみがうら市横堀地区の大日如来像

かすみがうら市横堀集落の一角に大日様とよばれる場所がある。大日様のお堂には仏像と共に高さ１m、幅 35cm、厚さ５cmの変成岩に大日如来坐像が刻まれている石仏が安置されている。表面には、上部に「大日　如

来、図像（胎蔵界大日如来坐像・蓮台・台座）、元弘二二　二十八」、元弘年銘の右側に「慶安二年巳丑」、左側に「九月十五日」、その下に敬白と記される。この中で、図像の台座と元弘年銘は重なってみられ、図像・銘文のバランスから明らかに台座が追刻と考えられる。蓮台に坐する大日如来像と台座の間には不自然な空白部分があることから、慶安二年の段階で台座と慶安年銘が追刻されたものと考えられ、この板碑は当初大日如来坐像と元弘年銘のみが刻まれたものと考えられる。仏像と年号を上下直線的に刻む構成は、武蔵型板碑などで良くみられるものである。

横堀地区の東側は、中根川と飯田川が合流するところとなり、ここの台地上には中根長者屋敷跡とよばれる城館跡がある。中根長者屋敷跡には、現在も土塁と堀の一部が残存しているが、以前はこれらが方形に巡っていたようである。中根長者は、戦国武将佐竹氏に軍用金の徴用を申しつけられたのを拒絶したため滅ぼされたという、長者ぶりを示す伝承をもっている。この中根長者屋敷跡は、北・南・東側が中根川と飯田川の自然要害となるが、西側が連続する台地となり、防御が弱い。横堀地区は丁度中根川と飯田川が近づくところとなり、ここに台地を分断する堀を築くことで、防御を高めることができるのである。その横堀の名にふさわしい台地を刻む堀跡と思われる場所が、ここには存在している。この横堀を含めた中根長者屋敷跡がいつの時代まで遡るか不明であるが、この元弘４年（1334）造立の大日如来像が、その事情を知り得ていると思われる。

２．４　小美玉市竹原地区の阿弥陀三尊像

小美玉市竹原の希望ヶ丘公園の一角に、変成岩に線刻された通称「掃部衛門碑」がある。掃部衛門碑は、高さ92cm、幅 78cmを測る板石に、中央に阿弥陀如来立像、その右下に観音菩薩立像、左下に勢至菩薩立像のいわゆる阿弥陀三尊来迎図を刻んでいる。阿弥陀如来は、脇侍の観音・勢至菩薩より一際大きく描かれ、光背に放射光（三十本）で頭部周辺は二重円輪を配する。飛雲に蓮台を二つ乗せ、その蓮台に両足を乗せている。印相は、上品下相を結び、左上から右下の俗界に向かう姿となっている。阿弥陀像右下の観音菩薩は、両手に蓮台を持ち、円光背を備える。阿弥陀像左下の勢至菩薩は、両手合掌の姿で観音菩薩同様に円光背を備えている。観音・勢至菩薩共に飛雲に二つの蓮台を乗せ、両足で蓮台を踏む構図となっている。この三尊像の両側には銘文が刻まれている。右側には５行みられ「奉読誦法花妙典□□部供養之所　現世安穏後生善処為七世父母也　栗原掃部衛門西阿弥陀仏　妙意禅定尼　妙心禅定尼」と刻まれる。左側には１行みられ「永禄四年辛酉卯月廿九日敬白」と記されている。

この掃部衛門碑は、元は現在地よりも南の台地突端部に立てられており、その場所は「掃部衛門山」と呼ばれていた。この場所の南東部には、竹原城跡がある。竹原城は、園部川左岸に張り出す台地を水堀によって分断し構築している。その規模は、外郭で東西約282m、南 北約246mと想定され、広大な城郭といえる。『常陸名家譜』によると竹原城の築城は、永禄２年（1559）に常陸大掾平貞国が府中城の支城として築き、弟の義国を城主として竹原性を名乗らせたことに始まるという。この竹原四郎義国は、兄の貞国の命に従い、天文６年（1537）の田余（小美玉市玉里地区）の取手山に砦を築いて小河城（小美玉市小川地区）の城主園部宮内大輔の進攻に備えたりして活躍している。竹原城に居城したのも、北からの江戸・佐竹軍に備えるための前線基地を固める目的であったが、幾多の合戦の後、天正18年（1590）に佐竹軍の総攻撃で竹原城は落城している。この竹原城を守る竹原四郎義国の配下に竹原四天王と呼ばれる武将がおり、その中に掃部衛門碑の主である

栗原掃部衛門がいた。この栗原氏については、竹原四天王という以外の伝承資料はない。掃部衛門碑が立てられたのは、竹原城が築城されてから僅か２年後のことであったが、この頃は常陸国内で内戦が多発する時期であり、特に永禄年間からは佐竹氏の常陸国南部の侵攻が続いた時であった。つまり、佐竹氏と共に被官化した江戸氏の南下侵攻は、大掾氏領北部を守る竹原氏軍にとって、限りない脅威となったものと考えられる。そうした事象が栗原氏の法華経読誦供養そして石仏造立へとなっていったといえるのではなかろうか。

２．５　石岡市谷向地区の阿弥陀如来像

石岡市谷向地区の八幡神社には、変成岩に線刻された通称「弘法の墨かけ石」がある。弘法の墨かけ石は、高さ72cm（下部埋没）、幅61cm、厚さ11cmを測る板石に、中央上部に円の中に刻まれた梵字（キリーク・サ・サク）が並列し、その下のやや左寄りに阿弥陀来迎図と右寄りに華瓶一つを配する。阿弥陀如来は一尊像で、光背に放射光（八本）で頭部周辺は二重円輪を配する。飛雲に蓮台を一つ乗せ、その蓮台に両足を乗せている。印相は、上品下相を結び、左上から右下の俗界に向かう姿となっている。全体的にみて小美玉市竹原地区の阿弥陀像よりは簡略化している。阿弥陀像の左側には銘文らしきものが確認できるが、摩耗のため判読できない。

弘法の墨かけ石は、別称「光明石」との伝説がある。この伝説は、「谷向地区の百姓が馬を曳いて村上地区へ向かう途中に、小さな溝に架けられた石橋にさしかかった。その石橋を渡ろうとしたところ馬が躓いて負傷してしまったという。百姓は驚いて馬の傍へ走り寄り、ふと石橋の方を見ると橋の石から眩い御光が発して目がくらんでしまった。恐る恐る近寄ってみると、その橋の石には阿弥陀様が彫られており、そこから御光が放たれていたことが分かった。その後、里人と謀って八幡宮に納めたということである」。ある場所にあった阿弥陀如来石造物が丁度よい板石であったことから水路の石橋として使用されていたことを伝説は示しており、八幡宮に当初からあったものではないことを示している。

弘法の墨かけ石が立てられた谷向地区は、石岡市の北部に位置する。地区内の勢至堂境内には室町時代末期の五輪塔（空風水輪のみ）が所在することから、この頃はすでに五輪塔を供養塔として造立できる人物が谷向地区には存在したことが分かる。さらに寛永２年（1625）の『常陸国新治郡府中御縄打水帳』に「谷むかい」と記載があり、土地が開墾されていた様子を伝え、さらに勢至堂には元録11年（1698）に谷向村人20人以上で結集供養した十六日念仏塔が造立されるなど、江戸時代初期には村として存在したことを裏付けている。弘法の墨かけ石は、先の伝説によると谷向から村上へ向かう途中に旧在したといえ、石橋に使用されていたことを考慮するとさらに別な場所からの移動が想定される。しかし、谷向地区の八幡神社へ安置されることを考慮すると、谷向地区内にあったものといえるのではなかろうか。さらに弘法の墨かけ石は、中世の制作と考えられるものであるので、中世にはこのような浄土信仰を行い、石造物を造立できる有力者が谷向地区に存在したということを裏付けできる資料といえる。

３．線刻されたみほとけについて

３．１　線刻技法について

石造物の彫刻技法には、先に示したように大きくみて陽刻と陰刻があり、陰刻の代表的なものとして線刻（線彫り）が挙げられる。線刻の石造物は、宝亀９年（778）の紀年銘が認められたという宇智川磨崖仏（奈良県五條市）の線刻観音立像、池から生じた蓮華をかたどった台座に宝相華唐草を絡ませた優美な

作例の笠置山虚空蔵磨崖仏（京都府笠置町）が、古い部類の平安中期の造立と考えられている。また京都市今宮神社の四面仏石は水成岩の四面に薬師・弥勒・阿弥陀・釈迦の顕教四仏の坐像を線刻するもので、阿弥陀如来の面の左方に天治２年（1125）の紀年銘が刻まれている。さらに鎌倉時代の作例として、奈良県三郷町の惣持寺本堂跡に建てられた一針薬師石仏があり、慶派仏師の快慶の下絵を彫出したものと考えられている。

線刻石仏は、比較的に磨崖仏に多く認められるものである。その多くが平安期のものであり山岳信仰に基づき彫出されたものと考えられる。磨崖仏は断崖絶壁などの危険な場所に彫出されるため、比較的容易に表現できる線刻という技術が好まれたのであろう。

それでは筑波山麓の線刻を施した常総型板碑は、どのような系譜で描かれたのであろうか。常陸国南部の線刻石仏で最も古いものは、つくば市古来の弥陀三尊図像板碑である。この板碑は、高さ2.5m、幅0.5～0.58m、厚さ6.5～7.5cmの緑泥片岩製である。上部には蓮台を逆にしたような形の天蓋を設け、線刻の瓔珞が五条垂れ下がっている。その下に、親指と第二指を捻じた来迎印を結ぶ阿弥陀立像が、正面向きに蓮台の上に彫り出されている。その下方両側に向かい合って、右側に両手で蓮台を持つ観音菩薩、左側に合掌する勢至菩薩が、同様に蓮台の上に立っている。三尊とも面や手足の部分はごく浅く平らに彫り残して、目鼻などは線刻し、衣文や蓮弁は縁を残して内側を薬研彫り風に彫り下げるなど、多様な手法で作られている。阿弥陀如来からは三条づつの放射光が四方に放たれ、三尊像の下部に五行にわたる流暢な行書体の銘文がある。「右志者慈父聖霊当　一十三年忌辰奉造立　文永玖年壬／申二月八日孝子／四人敬白　八尺青石率都婆一本　往生極楽為法界成仏也」阿弥陀像などが線刻以外にも平坦な薄肉彫りで彫出されている点を考えれば、純粋な線刻石造物とはいえないが、こうした平坦な浮き彫り技術と線刻技術を併用する例は比較的多く認められている。

下妻市坂井の大日堂に安置される阿弥陀一尊図像板碑は、高さ約1m、幅39.5cm、厚さ8cmを測る緑泥片岩製の板碑である。中央には、三重の円光背を持ち、右手を胸前に上げ左手を膝のあたりに降ろした来迎印をとる阿弥陀如来が蓮台の上に正面を向いて立つ。円光背からは十一本（２条づつ）の放射光が放たれている。像は薄い陽刻と線刻で表現され、衣文などは輪郭を残してその内側を彫り下げてあらわされる。蓮台は蓮弁の周囲を残して薬研彫りしている。蓮台の下には、三行に陰刻された紀年銘が認められる。「口妙尼　十二月一日　観応三□」とみえ観応３年（1352）の造立であることが分かる。

水海道市高野町の共同墓地には、弥陀三尊来迎板碑がある。高さ84.5cm、幅35.5cm、厚さ２～3.5センチの緑泥片岩製の武蔵型板碑である。上部を欠損しているが、中央に阿弥陀如来が窺え、肩から上を失うが、残存する部分から右下方を向いて来迎印を結び、飛雲･蓮台の上に立つ姿が分かる。その下方に同じように右下方を向いて来迎する、勢至菩薩（左側）、観音菩薩（右側）の脇侍二菩薩をともに線刻で表現している。二菩薩共に線刻の円光背を持つ。三尊像の下部に「延徳五年　十月廿三日」の紀年銘を刻み、その間に「七郎三郎」「弘尊」等が刻まれるが、大部分が摩耗のため不明僚である。

坂東市幸田の地蔵堂墓地に阿弥陀三尊来迎図を緑泥片岩に線刻で描いた板碑がある。高さ0.9m、幅約0.33m、厚さ2.5～3.5cmを計る、通称「辻念仏板碑」と呼ばれている石仏である。上部に天蓋を設け、瓔珞が五条（３本づつ）長く垂れ下がっている。その下に阿弥陀如来立像があり、円光背からは16本の放射状の光が放たれている。阿弥陀像の右側に

は観音菩薩、左側には勢至菩薩が配され三尊形式をとっている。両脇侍の下部中央には「辻念仏供養　（花瓶線刻）」、その両側に「さこの三郎」「ひこ七」ほかの俗名と「妙祐」などの法名16名の交名と「天文三年二月吉日」の紀年銘が刻まれている。この板碑については、彼岸念仏・天道念仏のような春分の農耕儀礼を背景とした念仏の可能性が指摘されている。その他、坂東市には鵠戸地蔵堂の天文６年（1537）阿弥陀三尊板碑（緑泥片岩）、藤田共同墓地の天文２年（1533）阿弥陀三尊板碑（緑泥片岩）、西念寺の天文７年（1538）阿弥陀三尊板碑（緑泥片岩）などの線刻石仏がある。

桜川市椎尾地区寺山の大日塚には、寛永期の造立と伝えられる金剛界大日如来石造物が祀られおり、岩屋の両側を支える板碑に、中世のものと考えられる線刻の阿弥陀如来像がある。この石造物は変成岩に描かれ、阿弥陀如来像は、三重の円光背、三条１本の放射光が12本放たれ、蓮台にのっている。衣文・印相そして蓮台の細かな表現は摩耗のため不明である。この阿弥陀如来像の下部には、70名に及ぶ庶民男女の交名が刻まれている。中世後期に盛んになる念仏集団の様子を伝えるものと考えられる。

このように常陸国南部の線刻技術によって描かれている石造物をみてみると、緑泥片岩で製作されたものが多くみられ、武蔵型板碑の系譜上にあるものと考えられる。それらには、ある特定の人物層の供養と集団で講を組み祈願するものと２通りに分かれる。石塔造立が地域上層部の人物層に限られていたものが、広く普及していく様相が窺え、次第に結集に代表されるまとまりをもつ信仰形態が確立し、石造物を造立する動きになっていく様子が読み取れるのである。まさに15世紀後半から17世紀初頭にかけての戦乱の世の不安に安堵を求める人間の精神文化の遺物といえるであろう。

３．２　線刻された像容について

筑波山東麓地域の線刻石仏をみると、地蔵菩薩、十一面観音、阿弥陀如来、大日如来が描かれたことが分かる。前述した石造物には、描かれる像容や戒名が刻まれる点、法華経供養の点など、極楽浄土への願い、つまりは死後の安泰を祈る石造物と考えられる。戦乱が頻繁に起こる中世の時代には、日常化した祈りの姿であったといえる。

当地方の地蔵信仰は、京の僧が常陸国に至り、地蔵丸と呼ぶ童子が地蔵の化身だと知って驚く説話が『今昔物語集』にみられたり、無住の『沙石集』にも筑波山麓の入道が自ら地蔵菩薩像を彫って信仰する姿がみられるように平安時代後期（十二世紀）頃から常陸国内において広く信仰されていた様子が窺える。石造物としては、常陸西部を中心にみられる武蔵型板碑の種子や正應二年（1289）に造立されたつくば市の三村山清涼院極楽寺の参道に立つ通称「湯地蔵」や天文六年（1537）銘のつくば市谷田部に所在する自然石型の地蔵尊、さらには天文十七年（1548）銘のかすみがうら市南根本阿弥陀院跡に立つ箱形地蔵は、「熊野参詣供養一結集」とみられることから熊野信仰に基づく地蔵菩薩への祈りと捉えることができる貴重な資料もある。筆者は、このかすみがうら市の箱形地蔵の造立背景には、天文十五年（1546）にあった「河越の夜戦」による死者供養を想定したことがある（千葉　2003）。箱型地蔵が立てられた南根本地区の武将中田雅楽助は「河越の夜戦」に参戦しており、当然のことながら支配下にある農民も参戦したことであろう。箱型地蔵は、そうした戦乱の世の不安を拭い去る目的も含めて地区農民が結集し造立された石造物と考えられる。

当地方の阿弥陀信仰は、天台系浄土思想の中で醸成され、平安期以降みられたものであった。さらに末法思想や善光寺式阿弥陀三尊像の導入や真宗の影響など浄土思想を根付

かせるには、事欠かない状況がいつの時代も存在していたことが分かる。しかも南北朝や戦国の動乱期には来世への祈りは日常的なものとなり、そこに阿弥陀信仰が動かざる重要な位置をしめていたものとなっていったのである。観音信仰についても同様で、阿弥陀三尊の他にも捕陀落浄土の教え、特に熊野信仰とともにその観音浄土信仰は中世を代表するものとして大いに信仰されていったのである。さらには戦国時代後半から起こる天道念仏は、大日信仰へと結びつき、引き継がれていった。紹介した大日如来を刻んだ石仏も、そうした動きが分かる貴重な資料といえよう。

このように地蔵・阿弥陀・観音・大日を石仏本尊として選択する理由には、すべて来世への不安を解消するための祈りが背景にあり、宗教環境の差異により選択する仏像に違いが生じたものと考えられるのである。

4．おわりに

筑波山東麓地方の線刻を施した常総型板碑を紹介してみたが、線刻するという技術形態は山岳信仰の中で、そして普及する系譜としては武蔵型板碑文化の影響と考えられるのではなかろうか。常陸国でも他国と同様に、或いはそれ以上に様々な宗教者による様々な宗教環境がいつの時代にも普及する状況にあった。そうした錯綜する宗教環境を、地域の人々が地域の状況に合わせ取捨選択していったのである。そこには、領主との関係、他地域との政治的関係などがあったが、祈願目的としては来世の祈りであり、それが地蔵・阿弥陀・観音・大日如来への祈りであった。

筑波山東麓地方の特に地域の中流領主層には、こうした文化を積極的に取り入れる人物がいたのであり、一時期ではあったが線刻石仏へ祈りを捧げたものと考えられる。その表現は上手なものいとは言い難く、像容も一様ではないため、地域石工が在地中流領主の依頼により描いた産物といえよう。しかし、この中に込められた祈りは切実なものであり、そのことを現代人は読み取らなくてはならない。こうして、中世人と対話ができ当時の社会に理解を深めることができるのである。

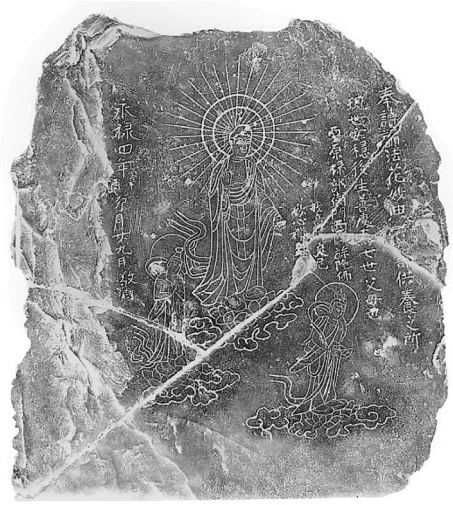
主要参考文献

吉田俊純　1983「下志筑村の中島家」『茨城県立歴史館報』10　茨城県立歴史館
横手　義　1984『千代田村の文化財』千代田村教育委員会
千々和到　1984「茨城県南部の中世金石文資料」『茨城県史研究』52　茨城県史編集委員会
茨城県　1986『茨城県史　中世編』
内山純子　1986『東国における仏教諸宗派の展開』
美野里町　1989『美野里町史』上巻　美野里町
川崎純徳ほか　1995『筑波山麓の仏教』真壁町歴史民俗資料館
黒澤彰哉　1996『石岡の石仏』石岡市教育委員会
桜井　明　1996『石岡の地名』石岡市教育委員会
糸賀茂男　1997「中世国衙の盛衰と大掾氏」『常府石岡の歴史』石岡市教育委員会
青木忠雄　2001『石仏と石塔』文化財探訪クラブ⑧　山川出版社
村田和義　2003『北関東三県の弥陀国像板碑』
千葉隆司　2003「茨城の鏡像と懸仏－中世宗教空間の復原－」『茨城県史研究』87　茨城県立歴史館
千葉隆司　2007「中世「出島」の宗教文化」『中世東国の内海世界』高志書院

かすみがうら市
十一面観音菩薩像

かすみがうら市
地蔵菩薩像

かすみがうら市
大日如来像

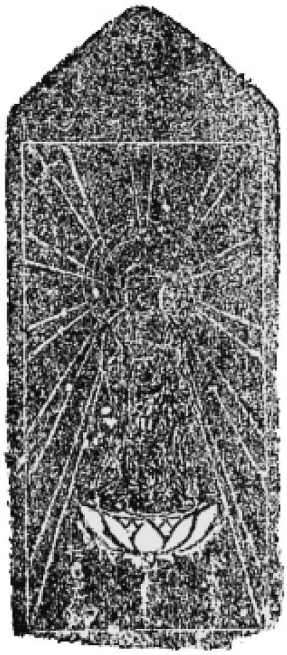


小美玉市　阿弥陀三尊像

石岡市　阿弥陀如来像

つくば市
阿弥陀如来像

常総市
阿弥陀三尊像



下妻市
阿弥陀如来像

坂東市　阿弥陀如来像

桜川市　阿弥陀如来像